

工場

小倉 一純

取引先との打ち合わせのため、群馬県に赴いた。群馬というと、安中市の東邦亜鉛のことを思い出す。

初めてその工場の夜景を目の当たりにした時、まるでSF映画の世界に迷い込んだような錯覚を覚えた。その日も、この会社の工場前を営業用の小型セダンで通りかかった。

信越本線・安中駅の背後には小高い山があり、その斜面一面に、工場の建物や施設が広がっている。歴史ある製錬工場だ。そこで海外から輸入した鉱石を原料に、純度の高い亜鉛をつくっている。

正門を入ってすぐ左側には、こぢんまりとした建物がある。工場に診療所はつきものだ。かつて僕が勤めた製鉄会社にもやはり診療所があった。風邪薬とか胃腸薬、水虫の薬などを処方してもらっていた。

製鉄会社の工場では、現業も事務職も皆、

安全靴を履いていた。そのせいか、水虫を患っている従業員が多かった。つま先には重量のある落下物から足先を守る鉄板が仕込まれていて、それはきわめて通気性の悪い革靴だった。

診療所の先生は、前橋の群馬大を出ていて、かなりの高齢だった。好々爺こうこうやという言葉がぴったりしわの御仁である。先生の皺だらけの顔には、長年の経験と温かさがにじみ出ていた。診療所に入るたびに、その穏やかな微笑みが迎えてくれる。それは工場の厳しい現実を忘れさせてくれた。

工場は、戦前の昭和時代の遺物とでもいうような様相を呈していた。まるでプロレタリア文学の舞台のような世界観である。

大学を出て、原価計算係として工場に配属された。なんと場違いなところへ来てしまったのだろうか――。これが、最初に感じたことだった。

安中の東邦亜鉛を通り過ぎると、すぐに国

道十八号線に突きあたる。そこを左折すると、混んでいなければ、小一時間で軽井沢町に行きつく。工場の雰囲気とは打って変わって、今度は、ブルジョワジーの香りが漂う。

だから、そこは、人生の交差点のような気がした。

工場萌えの女子たちは、ただ単に工場群の夜景がきれいだから、惹^ひかれているのではないと思う。

工場にある建物はふつう「建屋^{たてや}」と呼ばれている。その建屋の屋根や外壁などはスレートの波板でできている。石膏^{せっこう}ボードに近い素材だ。それに経年の汚れが染みついて、なんともいえず地味な佇^{たたず}まいである。

家電や車、一般住宅のような、カラフルさや派手さはない。流行を追いかけるなどというマインドもない。

工場というのは質実剛健だ。生産現場だから、コストをとっても重要視する。女性のおしゃ

れ感覚とは程遠い世界だ。

どんな新しい物を作っている工場も、昔のままの外観である。まるで時代に取り残されたような雰囲気だ。

実は工場は社会主義である。従業員たちは皆、労働組合に所属し、春闘で労働者の権利を勝ちとる。

資本主義の日本社会において、工場の中だけは、マルクス主義の世界観に裏打ちされている。

そんな諸々の違和感が、工場萌えの女子たちの心に映ばえるのではないだろうか。

彼女たちは意識していないかもしれないが、工場に数多あまたある夜間照明の向こう側のそんな違和感こそ、彼女たちの萌えの核心なのかもしれない。

かつて大学を卒業して、工場に配属となったが、当時は工場のそんな違和感に戸惑い、馴染むことができなかった。

だが強烈な印象を放つものには、時を経る

に従い、良きにつけ悪しきにつけ、愛着を持つものらしい。

今ではそんな工場が好きで堪らない。

最近では、垢ぬ^{あか}けてスマートな工場も建つようになつてきた。それに今時の若者は、違和感を覚えたら躊躇^{ちゅうちよ}せず転職する。嫌よ嫌よも好きのうち——、などという昭和世代の発想は、彼らからすると単なる自虐でしかない。

群馬での仕事の帰り道、僕は車を停め、かつて勤務していた相模原市の工場の夜景を眺めていた。その日は、この工場で亡くなった鈴木先輩の命日でもあった。

工場の前に一人の若い女性が立っているのが目に入った。彼女は、工場の方をじっと見つめていた。

「小学生のとき、お父さんが、この工場の事故で亡くなったの。製造技術課の係長だった。おじさん、そのことよく知ってるわよね」

「あぁっ」

「だから工場が大嫌いだった。でも、ここへ来ると、今でも、お父さんが汗を流して一生懸命働いているような気がするの……」

彼女は古びたタートルネックのセーターのお腹のところを撫なでながら続けた。

「このセーター、ボロいでしょ。お父さんの形見なの」

「杏里、きみはいくつになった？」

「わたしっ、十六歳」

杏里は鈴木先輩の娘である。彼女の話聞いてみると、この工場で働いていたころの思い出が蘇ってくる。

厳しい現実と温かい人間関係、その両方が僕の心に深く刻まれている。

「君のお父さんのこと、忘れていないよ」

杏里は微笑みながら、

「おじさんは元気でね」

といった。

工場の夜景が再び目に入る。まるで時代に

取り残されたようなその製鉄所の風景は、僕にとって未来への希望である。工場で働く人々の努力や情熱が、いつか新しい時代を切り拓くのだから。

勤務先の営業所に仕事が残っていた。車のエンジンをかけ、僕は再び国道を進む。